

(一) 次の文を読んで、あとの問に答えよ

具体的な例から始めてみよう。日本家屋は、周囲の「ないし」数面を縁取る「縁側」^{えんがわ}や、地面の高さの「玄関」^{えん}や、「軒」^{のき}などで、内部と外部の間の境界領域をしつらえている。このような領域には「縁」^{えん}という観念がつきまとうが、この言葉がさまざまな意味で頻繁に用いられることは、日本の社会があらゆる分野において、仲「カイ」ということを、またその動作主体となる象徴的第三者を、きわめて重視していることを明らかにしている。こうした価値づけは、日本の空間性を支える（幾何学的ではなく）位相的な論理から出てくる。事実おのおのの場所の特異性を強調する限り、重要なのは、おのおのの場所とその隣接する場所のひとつひとつとの関係を作り出すことである。この原則は、具体的な空間において、また物質的にのみ表現されるわけではない。空間一般において、すなわち関係の体系すべてにおいて表現されるのである。「a」自然／文化の関係の場合列の「ケン」²著である。たとえば、「縁側」は家と庭の間で象徴的第三者として機能する。鎮守の森（注1）は、都市と神々の間で象徴的第三者として働く。これらの第三項は、関係づけている二つの分野両方の特徴を持つ。しかし、そのどちらにも「カ」³元することはできない。「縁側」は、中でも外でもないし、自然でも文化でもない。そうではなくて、おのおのの対の両方の項の性質を持つのである。

第三者を排「ジ」⁴しない論理、すなわち「縁」の論理は、不完全性の論理、すなわち「間」⁵の論理を補強する。事実どちらも外的なもの（関係）を重視し、その分だけ内的なもの（本質、固有の実質）を過小評価する。実体Aは、実体Bとの関係Cにおいてのみ真に存在することが前提とされ、逆もまた然りなのである。

「1」の相対主義は、定義自体により象徴化を促すことになる。AもBもそれ自体では完全に存在せず、他のものでもあるという限りにおいて存在するのである。不完全性は象徴化を求め、象徴化は「縁」によって実現される。家は「縁側」によって自然と関係づけられて初めて、真に住めるようになるのである。また逆に、庭は家に対する補完性において、初めて意味を持つ。「b」、「実際に歩き回るには小さすぎて」、「縁側」から眺めるだけの庭もある。特に、禅寺の石庭の場合がそれにあたる。

個別の例として「縁側」、「一般的な例として「縁」、「これらは、「c」、「二つの分野の間でメタファー」（注2）が成立する場として現れる。ある観点からは、このような作用は、実のところ隣接性の関係（メトニミー）^{注3}として解釈できる。たとえば「縁側」は家／庭というメトニミーを物質化したものであると言えます。けれども、このような観点からは、その関係の純粋に象徴的な次元、すなわち自然から文化への移行が見えなくなってしまう。同様に鎮守の森の葉叢（注4）^{はまひび}は、それが物質的に隠している聖域の存在をメトニミーとして示していると言つこともできる。しかしながら、聖性、つまり聖域とそれを取り囲む森の存在が拡がる次元は、メトニミーではなくメタファーに属しているのである。森を横切つて進み聖域に至る、これは聖性の中を進むことであり、隠喩的には、植生としての森を通過儀礼としての森に移すことを意味する。この移動自体が別の行程を象徴する。すなわち、文化（都市）／自然（森）／超自然（神社仏閣）によって物質化された神々の領域（という移行である。あらゆる闘）^{注5}（について同じことが言える。境界域性、「d」両義性と通過がメタファーを始動させ、これを移動が具現化するのである。

注1 鎮守の森……土地の守り神を安置する神社の境内およびその周囲の森。

注2 メタファー……やかんの開口部を「やかんの口」と呼ぶように、二つのものが似ていることに基づいて、一方を他方にたとえる表現。

注3 メトニミー……やかんの中の水が沸騰することを「やかんが沸く」と言うように、「全体」(ここでは容器)と「部分」(ここでは内容物)の関係に基づいて、一方を他方で言い換える表現。

注4 葉叢……こんもりと茂った葉。

注5 鬨……微妙に異なる同種類の項目同士の差異が見分けられるかどうかの境目。

問一 傍線1～4にあたる漢字を、それぞれ次の(ア)～(オ)の中から一つずつ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- | | | | | | |
|---|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1 | (ア) 介 | (イ) 塊 | (ウ) 壊 | (エ) 拐 | (オ) 戒 |
| 2 | (ア) 堅 | (イ) 献 | (ウ) 賢 | (エ) 遣 | (オ) 顕 |
| 3 | (ア) 寛 | (イ) 還 | (ウ) 歡 | (エ) 環 | (オ) 換 |
| 4 | (ア) 叙 | (イ) 徐 | (ウ) 如 | (エ) 除 | (オ) 助 |

問二 空欄「a」～「d」に入るもっとも適当な語を、それぞれ次(ア)～(オ)の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- | | | | | | |
|---|----------|----------|----------|-----------|-----------|
| a | (ア) とはいえ | (イ) されど | (ウ) とりわけ | (エ) いかにも | (オ) それでいて |
| b | (ア) あたかも | (イ) もっとも | (ウ) あながち | (エ) なかんずく | (オ) けっきょく |
| c | (ア) それでも | (イ) しかるに | (ウ) たとえば | (エ) したがって | (オ) ともあれ |
| d | (ア) さらに | (イ) すなわち | (ウ) さながら | (エ) あまつさえ | (オ) おそらく |

問三 傍線部Iの「この相対主義」を説明した箇所を、第三段落(「この相対主義は」から始まる段落)の文中から抜き出した場合、その箇所の最初と最後の四字は次のどれか。次の(ア)～(オ)の中からもっとも適当なものを選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- | | | | | | |
|-----|------------|-----|------------|-----|------------|
| (ア) | 定義自体……になる。 | (イ) | AもBも……である。 | (ウ) | 不完全性……される。 |
| (エ) | 家は「縁……である。 | (オ) | 庭は家に……を持つ。 | | |

問四 傍線部 の部分は、「鎮守の森」を具体例として考えると、なにがどうなってしまうことなのか。次の(ア)～(エ)の中からもっとも適当なものを選び、その記号の記入欄にマークせよ。

(ア) 鎮守の森は、それが包み込んで隠している聖域の存在をメトニミーとして表しているということが分からなくなってしまう。

(イ) 聖性の存在と、鎮守の森が取り囲む聖域の存在の関係が、メトニミーなのか、メタファーに属するものなのか判断できなくなってしまう。

(ウ) 鎮守の森を抜けて神社へ行くことと、人が文化から聖域に移動するときに通過儀礼を与えられることとのメタフォリカルな関係に考えが及ばなくなってしまう。

(エ) 文化から都市へ、自然から鎮守の森へ、そして超自然から神々の聖域へのそれぞれの移動が純粹に象徴的なものであることが見過ごされてしまう。

(二) 次の文を読んで、あとの問に答えよ

僕は書籍のデザインを手がけることが多く、物事をそういう形にまとめることが好きでもある。しかし今日、情報テクノロジーは加速度的に進化し、情報の形も様々になった。そんな状況にあっては、書籍はもはやメディアとしての主役を降りたのだと考えるべきかもしれない。情報を流通させる速度や密度、そしてその量などに関しては、書籍と電子メディアでは既に比較にならない。しかし一方で、書籍の役割そのものがついで去ったとも考えにくい。おそらくは、このあたりで一度、僕らは「書籍とは何か」ということを再確認する必要があるだろう。それをしないまま、従来の方法で書籍のデザイン軒続けていくのはいかにも時代認識が甘いように感じるのである。

「(ア)」

冷静に眺めてみると、紙という素材はメディアとして随分と重い責任を担わされてきた。特に情報の流通速度がどんどん加速していく時代においては、紙はマテリアル(注1)である前に「無意識の平面」であったとわかっていいかもしれない。万年筆で手紙を書くにも、プリンターで画像を出力するにも、まずはニュートラルな白い平面としての紙がそこにあった。それは1対2という「1」な比率を持つ白い画面で、物質性はむしろ捨象され、映像や文字を運搬する「1」な媒介物として認識されていた。世界の三大発明として紙が与えられている名譽もまさにそういうニュートラルなメディアとしての性質に對してであって、天然物に触れる喜びを指先に運んでくれる物性に對してではない。だからモニタースクリーン(注2)が常に身近に置かれるようになったとき、人々はその素材としての性質や魅力を考慮することなく、「ペーパーレス(注3)」という言葉を口にしたのである。

そういう観点から考えると、今日、紙はメディアの主役を降りて、実務的な任務から解放されたおかげで、再び本来の「物質」として魅力的にふるまうことが許されるようになったのではないか。僕はそんなふうにいるのである。

「(イ)」

確かに書籍は、一定の情報をストック(注4)するメディアとしては大袈裟かもしれない。重いし、かさ張るし、汚れるし、風化もする。デジタルデータ(注5)にして格納すればごく小さなメモリーの中におさまる程度の情報が、わざわざ書籍の大きさに仕立てられているわけである。しかしながら情報は、大量にストックしたり高速で移動させたりするだけのものではない。むしろ、情報と個人の間を冷静に洞察するならば、情報をいかにじっくりと味わえるかというポイントが重要になってくるのである。書籍に関していうならば、「甲」の方が、「乙」より人に心地よい使用感と満足をもたらせるかもしれないのである。「(ウ)」

僕は現在でも書籍というメディアが有効であると思うし、その効果は社会が考えているほど減退してはいないと考えている。あなたが今、手にしているこの本にしてもそうだ。自分の頭から生まれ出た言葉の数々を、閲覧しやすい便利な場所においておけばいいのであれば、ウェブの中か、あるいはCDのようなものに格納するという方法もある。しかし僕はこうして本というメディアを選んでる。それはこの情報を、紙に刷られた文字として味わっていただきたいからであり、手ごたえのある重量を持った物質として人に手渡したいからである。また、電車の中で鞆から取り出して気ままにページをめくってもらいたいからであり、時間が経てば風化して骨董品になってくれるのがいいと思うからである。もちろん、デザイナーとして、みなさんの手のひらの中でこの本がいい雰囲気(かま)を醸し出すように工夫してもいい。要するに、情報を右から左へと移すのではなく情報を慈しむという観点で書籍の魅力を意識している。「(エ)」

僕はノスタルジー(注6)に捉われて紙を臍(へそ)肩(かた)しているわけではない。僕は電子メディアが嫌いではないし、電子

- (エ) 紙の性質を通して受け手が情報を味わつことのできるデザイン
 (三) 次の文を読んで、あとの問いに答えよ。

ある人はいく、人は慮おもんはかりなく、いふまじきことを口疾くちとくいひ出だし、人の短きをそしり、したることを難なんじ、隠すことをあらはし、恥ぢがましきことをただす。「ア」「われはなにとなくいひ散らして、思ひもいれざるほゞに、いはるる人、思ひつめて、いきどほり深くなりぬれば、はからざるに、甲恥をもあたへられ、身果みつるほゞの大事にも及ぶなり。」(イ)「笑みの中の剣は、さらでだにもおそるべきものぞかし。心得ぬことを悪あしざまに難じつれば、かへりて身の不覚あらはるるものなり。」(ウ)「

大方、乙「丙軽かるき者になりたれば、丁それがしに、そのことな聞かせず。かの者にな見せそ」などいひて、人心をおかれ、隔てらるる、口惜くちをしかるべし。「エ」「また、人のつつむことの、おのづから漏れ聞こえたるにつけても、「かれ離れじ」など疑はれむ、戊面目なかるべし。

「己、かたがた人の上をつつむべし。多言留たげんとじむべきなり。」(オ)「

問十 次の文は、本文中に入るべきものである。もっとも適當な箇所を「ア」「イ」「オ」の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

これらすべて、あるまじきわざなり。

問十一 空欄「ア・イ」の中に入るもっとも適當な語を、それぞれ次の(ア)～(オ)の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- (ア) 足 (イ) 口 (ウ) 手 (エ) 身 (オ) 耳
 (ア) かかれど (イ) さりながら (ウ) さるは (エ) しかれば (オ) もしは

問十二 傍線部甲のように述べられる理由として、もっとも適當なものを次の(ア)～(エ)の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- (ア) 自分では何気なく発言したことであっても、いわれた方としては思い悩む場合もあるから。
 (イ) 人は、他人から悪意に基づく批判を受けると、思いつめたり、腹立たしくなったりするから。
 (ウ) 人々のあいだで話題にされただけでも、いわれた人間としては憤りを感じることがあるから。
 (エ) 元々は思い入れのなかったことでも、人からいわれているうちに気になってしまふことがあるから。

問十三 傍線部乙の意味としてもっとも適當なものを次の(ア)～(エ)の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- (ア) あの人の、そのことを伝えない方がよからう。
 (イ) 彼には、そのことをよくい聞かせてくれ。
 (ウ) 誰それには、そのことを話すなよ。
 (エ) 私に、そのことを聞いてくださいよ。

問十四 本文の内容に合致しないものを次の(ア)～(オ)の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- (ア) ある人が謹慎していると聞き及んだときには、なるべく近づかない方がよい。
- (イ) さほど考えもせずに、他人の欠点についていろいろと非難するのはよくない。
- (ウ) 他人の身の上に関して、あれこれと発言することは遠慮すべきである。
- (エ) 当人が恥ずかしいと思うようなことを問いたただすのは、望ましくない。
- (オ) よくわからないまま人を批判すると、自身のあやまちを露呈させることになる。